一．オテテ　キレイニ　チテ

ヨシコは／手の皮がむけて／胸も腹も顔もつぶれている／壕のうす暗がりに／私は黙って座る／からだのほてりが／駆け抜けてきた炎の街をよみがえらせ／助かった！／ふるえながら一息ついたとき／　オテテ　キレイニ　チテ／ヨシコの唇はたどたどしく動いて／そのまま／息絶えてしまった

『新編・ヨシコが燃えた（たかとう匡子詩集）』が、今年三月に発行された。最初の発行は一九八七年だが、神戸空襲を記録する会（代表・中田政子さん）の活動の広がりなどもあって、再刊待望の市民の思いが今春の新編発行となった。詩集の中心は、本のタイトルにもある「ヨシコ」。長い詩なので、その一部を前述のように紹介した。

空襲の時（たかとう匡子さんの場合は姫路空襲）、手をひいて一緒に逃げた妹を焼死させてしまったと、その後の人生で悔やみ続けてきた。空襲・戦争の恐ろしさ・悲しみ・切なさを表している代表的な詩だ。

二．神戸空襲を記録する会

戦後六十二年、全国各地に空襲を記録する会がある。神戸にも、市民団体の神戸空襲を記録する会が、空襲犠牲者合同慰霊祭（三月）や戦跡ウォークなどの毎年の事業をやりながら、当面は空襲犠牲者名簿の作成に力点を置いて活動を続けている。

しかし、行政、とくに神戸市の姿勢は正直言って冷たい。例えば、大阪では市や府の協力もあって大阪城の近くの「ピースおおさか」で空襲犠牲者名簿が戦時中の市民生活の品々とともに公開・展示されている。

今年の神戸空襲犠牲者慰霊祭（兵庫区　薬仙寺）

神戸では、空襲の記録や記憶が年々失われていく中、神戸空襲を記録する会がコツコツと犠牲者の名簿を作成している。七千名～八千名と言われる空襲犠牲者のうち、記録する会で名簿化できているのは約一割ほど。時間との競争であり、民間の市民団体だけの手に余る部分が多い。今春、行政の積極的な協力が必要として神戸空襲を記録する会が神戸市へ申し入れしているが、残念ながらまだそうなっていない。

また、市民から集めた遺品や戦争記録も一部の展示以外は、あの非核神戸方式の神戸でバーチャルのHP上で展示されて

いるだけ。当初構想された平和記念館は震災を表向きの理由に見送られたままだ。

だが一方で、会の活動が若い人たち、とくに高校生の間に広がり始めている。県立須磨友が丘高校の放送委員会のメンバーは、前述の詩「ヨシコ」を読んで感動しラジオドラマ「潮騒ノ記憶」やドキュメンタリービデオ「キオク」などを制作している。

三.「空襲を記録することは抵抗運動」

憲法を生かす会・灘（以下、生かす会・灘）が憲法サロンの講師として神戸空襲を記録する会の代表・中田政子さんを招いてお話しを聞いたのは、戦後六〇年の夏だった。それまでの憲法を中心にした活動から一歩足を踏みだして、せめて戦後六〇年の年ぐらい神戸空襲の話を聞いてみようと。

一九四五年三月十七日の神戸空襲で一歳八カ月の姉を亡くした経験を持つ中田さんが、その時に私たちへ語った言葉が忘れられないで今も耳に残っている。

「庶民の悲しみや体験、六〇年経っても癒されない気持ちに添いたい。神戸空襲を記録し続けることは、抵抗運動で、平和を訴えることです」と。

主な神戸空襲と被害状況（1945年）

月　日	時 間 帯	攻撃目標と被害地域	B29 機数	爆弾トン数	死者
3月 17 日	02:05 ～ 05:15	三菱神戸造船所、兵庫区、長田区、須磨区、中央区、灘区	309	2,300	2,598
5月 11 日	08:40 ～ 11:15	川西航空機甲南工場、灘区、東灘区	92	460	1,093
6月 5日	07:30 ～ 10:30	灘区、中央区、長田区、須磨区	481	3,000	3,184

資料：『神戸大空襲－60年から明日へ』（2005・神戸新聞）

神戸への模擬原爆（パンプキン）の投下（1945年７月24日）

攻撃目標	「　」＝米軍報告書の記述
国鉄鷹取工場	「目視で攻撃、優秀な結果」（実際には須磨区若木町に落下）
川崎車輌会社	「目視で攻撃し、爆発は 12 時方向 240 フィート」
三菱重工業	「目視で攻撃し、優秀な結果」
神戸製鋼所	「目視で攻撃したが、投弾後雲に」（爆撃機はエノラゲイ？）

資料：『米軍資料・原爆投下報告書－パンプキンと広島・長崎』（1993・東方出版）

六十二年前の神戸空襲は、右表のように大きなものが三回と言われる。三月の空襲が神戸市西部中心であったのに対し、残りの二回は灘区を含めた神戸東部の地域であった。

また、相次ぐ大空襲で神戸の街はもはや灰燼と帰したが、敗戦の約三週間前の七月二四日には、神戸に模擬原爆（パン

プキン）が投下されている。主要には原爆投下の訓練を目的とした作戦で全国各地でも実施された。神戸の場合、未確認だが、広島に原爆を落としたエノラゲイが灘区の神戸製鋼に模擬原爆を投下したようだ。

四．なだ・戦跡ウォーク

前述の中田政子さんのお話がきっかけで、自前の戦跡ウォークに生かす会・灘が取り組んだのは昨年の夏だ。

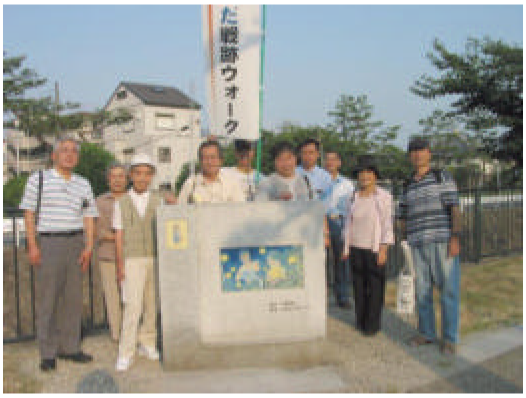
真夏の八月六日の午後三時に会場に集まり、灘区で空襲を経験した方から当時の体験談を聞き、夕方近く少し涼しくなり始めた頃から灘区の東部地域を通り、最後は灘区の東端、記田町一丁目の公園内にあるアニメ「火垂るの墓」記念碑まで歩くという企画だ。

実は、空襲体験はまだしも、灘区の「戦跡」に事務局は困った。戦後六〇年余、また大震災も経て、「戦跡」が残っていない。とくに、震災前にはあったものが、倒壊したり建て直されたりで、当日のコース上には見当たらない。

しかたがないので、かって灘区に住んでいた作家・野坂昭如さんがらみの日程を作成した。

戦争当時、灘区中郷町三丁目に住んでいて空襲に遭った野坂さん、その体験が「火垂るの墓」という小説になり、アニメ化もされた。

戦跡ウォーク当日は、そのいきさつや当時野坂さんが通学していた成徳小学校や、中郷町付近の様子など、当時を承知している参加者に話してもらった。


06なだ・戦跡ウォークは「火垂るの墓」記念碑まで

また途中の御影公会堂では、それこそ今回ウォークの唯一の「戦跡」＝壁に残る焼夷弾の跡を見て当時を回想し、最終地点・アニメ「火垂るの墓」記念碑まで、夏の残照を浴びながらみんなで歩いた。

あとで参加者に聞くと、みんな最初から特別なモノ、つまり「戦跡」を期待していたわけではなかった。原爆投下の夏の日の午後、空襲体験を聞き、みんなで一緒に歩き、終了後の冷たいビールを楽しみにして参加したそうだ。まさに案ずるより・・・だ。

五．何を伝え、何を残すのか

先般、「ＪＲ福知山線事故調査・最終報告書」が公表された。改めてＪＲ西と国の責任が問われなければならない。

ところで、一〇七名の事故遺族の中で犠牲者の車両における乗車位置をずっと追究している方がある。事故で犠牲になり、もう帰ってこないことがわかっていても、どの場所で、どんな思いで亡くなったのか、知りたい・近づきたい、鎮魂の意味も持つのだろう。

十二年前の大震災での犠牲者についても、その氏名・犠牲になった場所は、概ね掌握され慰霊の銘板も設置されているところだ。

しかし、神戸空襲についてそれはない。大震災より多くの犠牲者が出たのにもかかわらずだ。もちろん、空襲は神戸だけではない。また、六十年余の時間の大きな障壁もある。

だが、なぜ大阪やその他の空襲を経験した街の多くにあって、神戸にはなぜ空襲犠牲者の名簿がないのか？

神戸は、「満州国」並の植民地方式で街が運営されてきたと指摘する学者もある。表向き「美しい国」で、ハイカラな街・神戸だが、そこに住み生活する市民の思いが大切にされてきていない。震災直後の困難な時期に三五万人集めた神戸空港住民投票の署名が、いとも簡単に反古にされたのは、つい最近の話なのだ。

など・戦跡ウォークでは、こうした行政の姿勢を改めさせたい。同時に、空襲で亡くなった人たちの無念な思いや、生き残った人たちの辛酸をなめたその後の生き方をしっかりと伝えていきたい。たとえ、モノ＝戦跡が乏しくなった時代であれ、一人の人間の生き死にを大事にしたいと思う。

“たった一人の夢は一つの夢に過ぎないが、多くのものが一緒に夢見ればそこに新しいことが始まる”